

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520007

研究課題名(和文) 日本的美意識の哲学的基礎づけ 侘び・寂び・幽玄を中心に

研究課題名(英文) The Philosophical Foundation of the Japanese Concepts of Beauty: With a Focus on "Wabi", "Sabi" and "Yuugen".

研究代表者

佐藤 透 (Sato, Toru)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：60222014

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、研究期間以前にすでに研究者が実施していた美学・芸術論一般に関する考察と、その考察の侘び概念への応用をさらに発展させ、日本特有の美意識と称される「侘び」「寂び」「幽玄」について、明確な哲学的規定をすることにあった。結果として、大西克禮らの優れた先行研究を批判的に継承しつつ、美および芸術の機能に関する研究代表者自身の見解から「寂び」および「幽玄」に関して、その美意識としての一般性と特殊性とを論定した。三つの美意識を相互連関の下において一つの全体に纏めることは残された課題となった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to make a philosophical analysis of the Japanese traditional concepts of beauty: "Wabi", "Sabi", "Yuugen". In this research, we examined the theory of OHNISHI Yoshinori (a Japanese researcher of aesthetics; 1888-1959) concerning these concepts especially, and pointed out the problems. And we tried to analyze these concepts from our original point of view. We defined two basic functions of art and beauty and the characteristics peculiar to the three concepts of beauty from the viewpoint of these two functions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学 美意識 侘び 寂び 幽玄

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本的な美意識の典型と目される「侘び」「寂び」「幽玄」に関しては、その国語学的・文学的な研究は既に多くなされているものの、これらが美意識としてどのような一般性と特殊性とをもっているのかという美学的・哲学的研究は、皆無ではないものの、不十分と言わざるを得ない状況であった。

(2) しかし、こうした美意識を明確に規定する試みなしでは、それらの本性はいずれ見失われてしまう可能性があるため、従来の美学理論一般や、国内での文学的研究等を参照しつつ、こうした概念の哲学的研究が急務と思われた。

2. 研究の目的

本研究は、日本の美意識の典型とされることの多い「侘び」「寂び」「幽玄」について、従来の研究では非常に手薄であった、美の認識一般の成立構造を踏まえた上で、それら日本の美意識を特性付け、位置づけることを目的とした。同様の問題意識に立つ大西克禮による先行研究は、当時のドイツ美学の立場から日本の美の諸概念を位置づけているが、日本の美意識の成立機序に関する考察は十分なものとは言えない。研究代表者はすでに美と芸術の機能一般の考察から「侘び」概念を捉え直す議論を展開したが、本研究はこの議論を深化させつつ、「寂び」「幽玄」概念へも拡大することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究を遂行するためには、美とは何か、芸術とは何かという一般論を基礎としなければならないが、けっしてすでに解決済みの問題ではないこの問題を練り上げることが必要となった。具体的には研究代表者がカント美学等に基づきつつ美と芸術にエポケー機能と開示機能との二機能を見る見解をさらに展開する必要があった。

(2) その上で、特に「寂び」「幽玄」が、美意識としてどのような一般性と、特殊性とをもっているのかを、哲学的に検討することとなった。この検討にはこうした概念が歴史上どのように文学作品等の中で使用されてきたのかという文献学的な確認と、これらの美意識の背景にある禅仏教等の思想的な影響を確認する必要があった。

(3) 美学的研究の核心的部分は、実際に芸術作品等を見るという体験がどうしても必要であり、上記のような文献研究を主としつつも、三つの概念が具現されているような作品等を実地に研修することで、文献研究のみでは不足する部分を補う必要もあった。

4. 研究成果

(1) 「寂び」概念について

従来、「寂び」の語義については、国語学的に二つの異なる解釈があったが、本研究ではまずそうした解釈論争を検討した上で、研究代表者が支持すべきと考える解釈を決定した。すなわち本研究では、復本一郎が指摘するように「寂び」の本義を「寂しさ」に深く関わるものとした。

その上で、それが何故美として意識されるのかに関する、大西克禮が『風雅論』他で展開する議論を検討し、さらにその問題点を指摘した。大西によれば、「寂び」は時間的な古さを意味する否定的契機なのであるが、これが美という積極的契機に転換される機序が必要であり、それは、人間の老いに見いだされるような一種の精神的な古高さのようなものを、私たちが想像力によって古い人工物等にも移入して美を見いだすのだという。しかし、研究代表者の見解では、こうした機序は現実に合うものではなく、想定する必要のないものである。まったく正反対のものが転移すると考えるから特殊な機序が必要とされるのであって、寂びの美は美一般の特質に加えて、寂びという要素を加え持つと考えれば、人為的な構成作用は不要になる。研究代表者は、美一般に関して、とくにカント的な規定「悟性と構想力との自由な戯れ」を基本にしなが、美と芸術とに二つの要素を、すなわち日常的で実利的な態度を中止する「エポケー機能」と、それと表裏一体となって実在を開示する「開示機能」との二つの要素を想定し、その観点から寂び概念の一般性と特殊性とを論定すべく試みた。

寂びの美は、美としての一般性を持ちつつも、芸術の内容が寂びたものにされることによって、芸術の非実用性はいっそう高められ、私たちの実際的生活は、高度にエポケーされる。また、芭蕉のさび句によく表れているように、そこで詠まれた心境は一種の仏教的境地を、いわば形而上学的実在を開示しているとみることが確かに可能であり、その点では大西克禮の指摘は正鵠を射ているように思われるのであるが、それが言語に置き換えられて抽象化されるや否や、多くの通俗的な解釈を可能にしてしまう。こうした点で、寂びに形而上学的・仏教的実在の開示機能があるとしても、それはあくまで限定的なものとみられるべきだと思われる。

こうした検討の成果は、下記5に挙げる論文で公表された。

(2) 「幽玄」概念について

赤羽学らが詳細に跡付けたように、日本の芸道において「幽玄」が語られる文脈は、和歌、連歌、能楽書、俳諧、発句、詩などの諸文芸に渡っていることが分かる。しかし、本研究では、(一)幽玄という語の使用例を歴史的に列挙するのではなく、そうした使用例の研究に基づきながらも、美意識としての幽

玄という概念の哲学的分析を行うこと、(二)その際に、他の美的概念で置き換えるものから幽玄美を分離して、その特徴的と思われる要素を分析すること、の二点を基本方針とした。

この概念についても、美学的検討として参照すべきなのは大西の研究であった。大西は、幽玄美の「深さ」を示す特性がフリードリヒ・テオドル・フィッシャーの言う「幽暗性」の概念に近接すると考え、この幽暗性が「崇高」という美的範疇に帰属させられていることから、幽玄美を、「崇高」という美的範疇の派生形態とみなすに至っている。そこで本研究では、崇高の概念について、大西が言及しているコーヘンおよびカントに遡源しつつ、三者の崇高概念を比較してその異動を検討した上で、大西の幽玄美の捉え方の問題点を二点指摘した。すなわち、まず、幽玄を崇高の派生形態とみなせるかどうかが問題となる。大西は、フィッシャーに従って幽暗性を崇高概念の重要な要素とみなしているが、果たしてどこまでそう言い切れるかは検討の余地がある。もう一つの問題点は、そもそも「美」「崇高」「フォーム」という基本的範疇を統合している「美的なもの」という概念が曖昧だということがある。三者相互の差異構造については規定されているが、これら三者に共通する要素である「美的なもの」とは何であり、非美的なものとはどのように区別されているのかの説明は、実はあまり明確でない。こうした検討に基づいて本研究では、先に述べたような、美と芸術が一般に持つと思われる二つの機能を明確にすることで、上記「美的なもの」の未規定性を補い、この視点から幽玄美の特性をも特徴づけた。

このような美と芸術の二機能からみた幽玄美の特質を考える際に、まず改めて確認しておくべきことは、多様な使われ方をする「幽玄」という語のすべての用法について考察するのではなく、他の概念で置き換え可能なものは排除して、いわば幽玄の幽玄たる所以、その固有の本質と思われる部分についてのみ考察するということである。大西はその幽玄美の核心を「深さ」と表現していたのであるが、本研究では、大西が七点に整理した規定のうち、「幽」や「玄」の語義により近い規定、すなわち、何らかの形で隠され又は蔽われているということ 一種の仄暗さ、朦朧さ、薄明、ということに立ち返って考え直してみた。過去の用例から見えてくることは、一言で言えば、幽玄美の特質は「個別の現実からの乖離」にあるということである。このようにみれば、上記の二機能に対して幽玄美がとっている特殊な位置を理解することはそう難しくはない。

幽玄の芸術は、それが芸術であるという点で、すでに実用的生活からのエポケー装置となっているが、芸術で表現される内容が幽玄なものであることによって、それはなお一段の非実用性、内容上の非実用性をもたらすと

言えるよう。個別的对象の輪郭が明確で、他の対象との区別がはっきりしていれば、私たちはそれを桜と名指し、雲と名指すことができる。対象を名指すとはそのものの本質を概念的に理解することであり、もしそれが現実的存在として確かな存在感を伴っていれば、花を手折って街に売りにゆくこともできようし、山に登って獲物を狩ることもできよう。また、それと同時に、私とそうした対象との対置関係も確立されている。対象は私の視界からは切り取られ、独立して動けるものとみなされ得る。私は、個別的对象とは別にこちら側に居り、向こうの対象を理解し、その概念を持ち、それを実用に供することができるのである。それとは逆に、対象間の境界が曖昧だということは、上記のことを否定する方向性を持つだろう。対象の個物化がなされず、つまりは周りと一体であり、記号化を許さず、自他の分離すら拒む。永続的对象が確立されないで、時間も空間も変わっている。個別的对象としての確立が不十分だと、それが現実世界に存在しているのか、いないのか、不分明になる。現実と夢や幻の境界が揺れ動く。そのような現実世界における存在感の希薄なものを、私たちは実用に役立てようとは思わない。つまり、そのように個別の現実から乖離した美や芸術に触れるとき、私たちはいっそう、実利的世界からのエポケーを促されるのである。

また、このことは、幽玄美が開示する實在ということに、そのままつながってゆくだろう。それは一言で言えば、「一如性の開示」ということになる。すなわち、幽玄美で描かれる対象の輪郭が鮮明でなく、各対象間の分離が不明確であることは、そうした個別的对象の存立とは異なって、あらゆる対象が一如に融解した別種の実在を開示する。悟性の眼からすればそうした対象の現実世界における存在感は夢・幻の如く希薄なのだが、それはかえってそれらが融解する一如の実在の存在感を訴える。またこれは同時に、対象とその観察者との対立をも揺り動かす。この一如性は、描写される個別的对象相互の垣根を超えた一如性であるだけでなく、描写される内容と、その鑑賞者という垣根をも取り払おうとする一如性だとも言えよう。

このような検討結果は、下記5に示した論文において発表された。

(3) 美学一般の検討と残された課題

上記のような個別的概念の検討と同時に、美学理論一般の再検討もなされ、とくに美と芸術の二機能のうち、エポケー機能について、実用的な美の問題が浮上した。というのも、美と芸術に日常的、実利的態度からのエポケー機能があるというとき、当然問題になるのが、日常的、実利的世界の中にある美、柳宗悦が「用の美」と呼んだものの位置づけからである。この点に関しても研究代表者は一篇の論文を仕上げたが、これは未だ公刊されていない。こうした点を含めて美学理論一般

を精練し、「侘び」「寂び」「幽玄」の相互関係をも明確にして、一つの著作にすることが残された課題となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

佐藤透、幽玄美とは何か ヨーロッパ美学からの照射と返照、『ヨーロッパ研究』第9号、東北大学大学院国際文化研究科ヨーロッパ文化論講座編、2014年、139-164

佐藤透、寂びの美と「積時性」 哲学的分析のための素描、『思索』第45号、東北大学哲学研究会編、2012年、109-130

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 透 (SATO TORU)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：60222014

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：